



Governor's Message

ACP 日本支部年次総会・講演会は今年 6 年目を迎えた。4 月 11 日(土)に今年もまた日本内科学会のご協力を得て、東京国際フォーラムで日本内科学会の開催中に合わせて開会することができた。支部会員も基本的には日本の内科医であり、このように日本内科学会の応援を得ながら、内科医を育てていただけるのはとてもありがたいことであり、日本内科学会の識見に、まず敬意を評したい。

Photo: Tetsuo SAKUMA

まず、午前中に開催された Dr. Gremillion と小原まみ子さんによる Western Style Case Discussion for ACP Associate and Medical Student Members には見学者含め 76 名、Luncheon for ACP Women Members (not for women only)には約 66 名、総会・講演会には 265 名、レセプションには 121 名の参加があった。

今年も研修医・学生向けのプログラムを午前中に開催したが、大変好評であり、今年も多くの学生の参加があった。特に Dr. Gremillion の症例からの問題提起、診かた考え方、ネットでも文献検索、双方向の議論とやり取りは学生や研修医には新鮮かつ刺激になったと感じる。お手本をじかに見せることがいかに効果的で、大事なことなのか、よく理解できると思う。小原さんも良いお手本であり、皆さん各人の積極的な教育へのリーダーシップに感謝と、更なる期待をしたい。

Luncheon for ACP Women Members では近年、特に悪化しつつある医師の労働環境と医師不足について Women's Committee と参加の会員で討議した。ここでも議論は真剣そのものであり、できることからどんどん実践していこうという雰囲気が出ていて頼もしく感じた。こも檜山さんはじめとした委員会全体の強い意思とリーダーシップが大いに発揮されている。私たちは、女性の活躍の場を広げることは、特に日本ではとても大事なことと認識している。この委員会の活動を見ても、国内学会によく見られることだが、男性に任せている委員会とは様相も、感覚的にも、積極性にも違いがあるように見受けられる。頼もしいかぎりであり、うれしいことである。

午後の Scientific Meeting は、ACP 会長の Dr. Harris、私の挨拶など、恒例ではあるが、例年 ACP 会長が参加されていることに特に感謝したい。このことは若い内科医にとって大きな励みと刺激になっていると思う。今年「臨床医による臨床医のための臨床研究」をテーマとした講演・パネル討論を行った。ACP 会長の Dr. Harris はじめ、メジャーリーガーの Dr. Meyer が参加してくださったので実り多い議論ができた。グローバルな時代にあって、視点の違い、社会の成り立ちの違いを超えて、国民、国境を越えた市民の視点からの医療、医師の育成という視点が、これからはさらに大事な課題になってくることと思っている。その点からも、この支部の存在、活動などが、これからの内科医の育成にも大いに資するところがあるはずと考えている。日本の内科医にとって更なる発展に何ができるのか、すべての会員に、自分たちの課題として認識し、小さなことでもいいので、日常の活動へ、このような意識を持ってほしい。

今年のレセプションも盛況で、Honorary Fellow の井形昭弘先生が乾杯の挨拶をしてくださり、また、日本内

科学学会会頭の岡芳知先生もご挨拶していただき、嬉しかった。

この会議の2週間ほどあとにACPの本会議がPhiladelphiaで開催された。ここでも超多忙の中を何人もの会員が出席してくれた。これらの報告、また東京、そしてPhiladelphiaでの写真なども、この支部のサイト<http://acpjc.naika.or.jp>で楽しんでいただけたらうれしい。

これからも、会員一同が力を合わせてこの支部の活動を盛り上げ、これからの内科医の育成に力を貸していただけることを大いに期待している。

レセプションやその後に開催された学生の企画による懇親会で話す機会があり、大変嬉しく思う。

Scientific Meeting 2009

Scientific Program Committee 委員長 今川彰久

2009年Scientific MeetingでのPanel Discussionは「臨床医による臨床医のための臨床研究」と題して、木野昌也先生、武田裕子先生の司会で行われました。



まず、ACP president Dr Jeffery P Harris により「米国におけるアカデミック・キャリア」と題した講演があり、米国の大学病院・教育病院において指導医がどのように臨床研究を行い、キャリアアップを図っているかについて、特に academic investigator, clinical investigator, clinical educator がどのような業務に携わっており、どのように



木野昌也先生 武田裕子先生

評価されているのかが紹介されました。

次に福原俊一先生より、メインとなる講演「もう一つのトランスレーショナル・リサーチ(T2):臨床研究って何?なぜ?誰が?どうやって?」がありました。臨床試験やトランスレーショナル・リサーチだけが臨床研究ではなく、「エビデンスを診療現場や地域に浸透させる」というもう一つのトランスレーショナル・リサーチ (T2)が極めて重要であること、臨床研究においては、診療現場に切実なリサーチ・クエスチョンを生み出せる内科医が主役であることが強調され、質の高い臨床研究を行う上で障害となる、データがない、時間がない、支援がない、どうやっていいかわからないといったバリアをどのように克服するかについて具体的な話があり、最後に「研究のための研究」から、「診療を変える臨床研究」への転換が必要であることが述べられました。

次に、日本における臨床研究の例として、「劇症1型糖尿病の発見と確立～症例から疾患概念へ」と題して私が、「なぜに抗菌薬は必要か?—認定内科専門医会風邪症候群標準化委員会による前向き調査」と題して富井啓介先生から、研究内容の紹介がありました。



最後に、日米両方の臨床現場での指導経験を有する Dr. George W Meyer から、「誰にでも取り組める米国流臨床研究の進め方」と題した講演があり、Recklinghausen 病における肝障害、消化管内視鏡検査における前処置、消化管内視鏡検査による血中ガストリン値への影響、アンホテリシンB急速投与における高カリウム血症と不整脈などの具体的な研究例をあげながら、資金、マンパワー、時間などの問題をどのように解決したかを披露され、最後にシンプルに問題をたて、シンプルなプロトコールをたてて問題を解決することの重要性を強調されました。

この後、講演に沿って討論が行われました。討論は非常に活発で、ACP 日本支部会員の先生方が多忙な日常診療の中でも「リサーチマインド」を失っていないことが感じることができました。

この後、講演に沿って討論が行われました。討論は非常に活発で、ACP 日本支部会員の先生方が多忙な日常診療の中でも「リサーチマインド」を失っていないことが感じることができました。



福原俊一先生



富井啓介先生, 今川彰久先生



Dr. Meyer Dr. Harris

Foresighted Scientific Meeting 2009 Incorporating Active Young Physicians and Medical Students

Publication Committee 委員長 宇野久光

都内の桜は盛りを過ぎていましたが、東京国際フォーラムでの ACP Japan Chapter の年次総会は、260 名の参加者で満開でした。

Case Studies (症例検討)



もはや当会の名物講演となった感がある Gremillion 先生の "Ichimoku Ryozen (一目瞭然)" が会場の期待のもとに始まりました。Gremillion 先生は、"A picture is worth a thousand words" の格言にあるとおり、"Visual recognition is one of the fun aspects of medical education" を毎回症例検討で実証されています。今回は "Yudedako byo (Asian flush)", "Crowned dens syndrome", "Mochi ileus", "Low CSF pressure headache" の症例を楽しく提示していただきました。特に

Yudedako byo (ゆで蛸病) では、アルコール性顔面紅潮を生じる ALDH 酵素の遺伝的多型性と食道癌のリスクとの相関を説明され、先生がテーマの一つとされている cross-culture medicine の演目となりました。講演の締めくくりは、"Culture is the major factor in health and longevity" で、それぞれの国で文化と健康には深い関係があることを主張されました。

College Update (学会最新情報)

ACP 会長である Jeffrey P. Harris 先生による講演内容は、"ACP Quality Improvement Programs" のタイトルで、臨床医が内科医として自己の質を改善する (Quality Improvement; QI) ために、どのようなプログラムを ACP が提供しているかという紹介をしていただきました。まず、臨床医としての自己評価の重要性、そのための ACP プログラム内容の基本構成について説明をされました。次に、実際の QI の提供源として、ACPNET (無料のネットによる臨床の知識と技術の自己研修プログラム)、Closing the Gap (チーム医療向けのオンラインシステムによる医療介入と教育)、Immunization QI Program (予防接種の教育) の 3 つのプログラムが紹介されました。まとめとして、現在臨床現場では、診療行為の妥当性は流動的であり、確たるエビデンスのもとに判断力は養われるのであり、ACP のプログラムは、実地診療とガイドラインのギャップを補うのに役立つというお話でした。さらに、米国の臨床検査サービスである Medical Laboratory Evaluation やレジデントの自己診断で指導医の指導の指針として用いられている In-Training Examination (IM-ITE) の紹介がありました。

Business Meeting (総会)

総会では、Health and Public Policy 委員会の宮崎仁先生より Professional Development のために行なった活動報告があり、続いて Credentials/Membership 委員会から朔啓二郎先生の ACP Fellowship 昇格のための資格および手続きの説明がありました。続いて、例年通り、各委員会の委員長より報告がなされました。さらに、Committee for Associate and Medical Student Enrichment (CAMSE)より、学生や研修医などを対象にした活動状況や本年秋に計画しているポスター研究発表会などについての報告があり、ACP 日本支部の若い医師に対する期待がみられました。また、Women's Committee の活動報告も時宜を得たものでした。

委員会報告の後本年の日本支部の Volunteerism Award の授賞式が行なわれ、本年は次の3氏に黒川清 Governor より賞状が渡されました。川本龍一先生(愛媛大学大学院地域医療講座)は、へき地医療、さらにプライマリ・ケアの普及につくされ、地域医療の研究の実績もあることから今回の受賞になりました。小原まみ子先生(亀田総合病院腎臓高血圧内科)は、産婦人科と提携して妊娠高血圧や合併妊娠庄の診療に従事し、「周産期医療の崩壊をくいとめる会」の中心メンバーとして社会活動が顕著であることが受賞理由となりました。湯地晃一郎先生(東京大学医科学研究所附属病院血液腫瘍内科)は、血液腫瘍内科医として全国骨髄バンク推進連絡協議会の白血病フリーダイヤル担当医師として、さらに骨髄移植のための骨髄採血器具不足の問題に対して、全国骨髄バンク推進連絡協議会の署名活動に尽力されました。3先生の今後のご活躍を期待しております。



黒川清 Governor より表彰された川本龍一先生



小原まみ子先生



湯地晃一郎先生



Harris 会長より黒川清 Governor に Evergreen Award の授与

続いて Harris 会長より、日本支部に対して Evergreen Award の授与が行なわれました。本賞を日本支部が受賞するのは昨年に引き続き2度目です。昨年は Internist Weekly (旧 Observer Weekly)の、本年度は Annals of Internal Medicine の翻訳に対する表彰です。代表として黒川清先生が受賞され、Publication Committee に対するねぎらいと、日本支部協力者に対する感謝の言葉がありました。

Buffet Reception(ビュッフェ式歓迎会)

ACP 日本支部は volunteerism を基本としており、上下関係、利害関係がなく、マナーを心得た平等感が特徴の一つだと思います。例年このレセプションに参加した人は、その自由な雰囲気には驚き、感心し、楽しんで帰ります。本年のレセプション参加者は150名でした。

例年通り黒川清 Governor の挨拶に始まり，HAM (HTLV-I-associated myelopathy)の発見者である井形昭弘先生の乾杯の音頭で会が始まりました。昨年 Gremillion 先生の症例検討で HAM の症例が提示され，HTLV-I の遺伝子解析から，最初のアメリカ人は縄文人たる日本人であるという説—The first American is Japanese—を示されていたので，参加者は井形昭弘先生の HAM 発見にまつわるお話を興味深く伺いました。



井形昭弘先生(右)

会の途中で，同時に開催されている第 106 回日本内科学会講演会の会頭である岡芳知先生が挨拶をされ，日本内科学会と当 ACP 支部の宜しき関係を参加者一同喜びました。



本年内科学会会頭の岡芳知先生(左)

次期会頭の小林祥泰先生(右)

会は和やかな雰囲気で行われ，日本支部より，Harris 会長，Meyer 先生，Gremillion 先生に記念品が贈られました。



Harris 会長



Meyer 先生



Gremillion 先生



Associate & Medical Student メンバーに囲まれる黒川清 Governor

本年の会のハイライトの一つは医学生や研修医の参加企画でしたが，レセプションにも彼らが参加することにより，会に若い活気と熱気が加わりました。

余談ですが，本年のレセプション会場は例年の会議場でのケータリングではなく，東京国際フォーラムの建物のレストラン「レバンテ」で開催されたため，たっぷりの飲み物，料理，さらに弾む会話を参加者は満喫したように思えます。

ACP Women's Committee 委員長 檜山 桂子



Women's Committee 委員長・副委員長・委員

ACP 日本支部年次講演会に先立ちまして、恒例となりつつある ACP 女性会員のつどい“Luncheon for ACP Women Members (not for women only)”を同日午前 11:40 から一時間、Dr. Harris ACP 会長、黒川日本支部長、理事の先生方、Dr. Meyer, Dr. Gremillion, Dr. Harrison にもご参加いただき、開催しました。近年悪化しつつある医師の労働環境と医師不足を鑑み、「男性医師にゆとりがなければ女性医師の労働環境への配慮は望めない、女性医師が仕事を続けら

れなければ、男性医師にゆとりは生じない、この悪循環を断ち切り女性医師を含む医療環境を改善するには、市民と医療関係者と行政と、それぞれの立場からみた問題点と改善案を共有することが不可欠」と考え、その具体策をテーマに意見交換しました。その基本資料として、Women's Committee や ACP 会員も積極的に参加しました ejnet 主催シンポジウム「医療崩壊～あなたは安心して病院にかかれますか？～」(2008 年 12 月 7 日、於新生銀行 新生ホール。後援: 日本医師会、日本女医会、大阪府女医会、至誠会、ACP 日本支部、SVP 東京、新生銀行)の提言(案)を ejnet の代表理事も務められる瀧野敏子副委員長が提示しました。



シンポジウムでは、市民と医療者との間で、医師の労働環境・医師不足問題の捉え方が大きく異なり、お互いの状況・立場・考え方の相互理解不足を実感しましたので、ランチオンではその対策についてまず議論しました。そして、実際にこれらの問題に直面し、経験している医師達が、現在の状況・問題点を発信し続け、市民の理解を得ることの重要性が提言されました。女性医師のワークライフバランス問題についても然りです。医師の間でも広く情報交換の場を設け、ネットワークを作り、問題点・対策・成功例の情報を共有することの重要性が強調され、Women's Committee として今後の活動の方向性が見えてきたように感じました。男性医師や若手医師からも広く意見を求めること、短時間勤務など多様な勤務形態も検討すること、子育て・家事支援の人を確保すること、など日本で遅れている面についても特に米国医師達から具体的な

対策を提案していただきました。ランチオン終了後にも Dr. Harrison や早野先生から提言をいただき、この場をお借りして御礼申し上げます。女性会員のつどい(男性会員も歓迎)は女性会員の communication のみならず、会員の相互理解と女性内科医の活躍・社会貢献に向けた自由意見交換の場と考えておりますので、来年も是非またご参加ください。

2008年 ACP 日本支部年次総会において、ACP Associate / Medical Student Member 対象の初めての企画として、“Western Style Case Discussion for ACP Associate and Medical Student Members (WSCD)”を行いました。大変好評で、年一度の総会まで待てないとの声に応じて2008年11月に第2回 WSCD を行い、そして、本年度の年次総会では、第3回 WSCD を開催しました。

この企画は、Clinical Reasoning に重点を置いた Case Discussion を米国で行われている形で体験するという趣旨のものです。また、他の大学の学生や他施設の研修医と交流する機会が少ないという昨今の状況の中、様々な施設の ACP の Medical Student Member や Associate Member が実際の症例や医療についてディスカッションしながら、交流することができる有意義な機会にもなっています。毎回、少しずつ新しい試みをしてながら、発展しています。

当日は、元ノースカロライナ大学 Professor で現在、亀田総合病院の臨床教育担当をしている David H. Gremillion 先生(FACP)が discussant attending, Associate Member の石井美穂先生が case presenter, 小原が facilitator となり、全国から参加した40名の研修医・医学生との discussants での case discussion となりました。(1)

今回は、presenter が実際に経験した、fever と change in mental status を呈した症例（最終診断としては、meningitis）を取り上げ、presenter から発信される臨床情報を discussants 全員で共有し、病歴と身体所見だけで鑑



別診断を考えられる限り多くあげ、Clinical Reasoning で絞り込んでいく方法で進行しました。この中で、ノースカロライナ大学医学生の Rebecca Chasnovitz さんが模擬患者を演じ、あいさつ・握手・会話などを含めた患者さんとのコミュニケーションの取り方の大切さも学びながら、参加者が問診や身体所見の診察実演に挑戦しました。(2)(3)。



また、WSCD 後の Social Gathering は、昨年の第1回は自分たちの理想の医師像、第2回は理想の臨床研修がテーマでしたが、今回の第3回では、医師の様々な Pathway を考えるというグループディスカッションゲームを、Associate Member で CAMSE 委員の松井勝臣先生とボランティアの石井美穂先生(4)が中心になって行いました。みな初対面であるにもかかわらず、

活発で真剣なグループディスカッションが行われました(5).

終了時には Surprise がありました. Associate / Medical Student Member 中心のグループ ASU (Associate-Student-United) から, 日頃より WSCD など, Associate / Medical Student Member をやさしく見守りながら, 指導に尽力してくださっている Gremillion 先生に, Certification of Appreciation が贈られました(6). 同賞を, 私にも贈っていただき, 思いもかけないことに大変感激しています. 今後ますます, Associate / Medical Student Member のみなさんのために努めていきたいと思います.



なお, 今回ボランティアをしてくださったのは, 石井美穂先生 (Associate Member, 亀田総合病院), 島久登さん (Medical Student Member, 東北大学), 須藤航さん (Medical Student Member, 筑波大学), 竹内麻里子さん (Medical Student Member, 東京大学), 田中政任さん (Medical Student Member, 大阪大学), 平山敦士さん (Medical Student Member, 山形大学), 村上和香奈さん (Medical Student Member, 防衛医科大学校), 森田知宏さん (Medical Student Member 東京大学), 渡邊聡明さん (Medical Student Member, 岐阜大学), の9名のみなさんです. ありがとうございます. また, ボランティアとともに, 昨年10月に発足した学生・アソシエート委員4名を含む Committee for Associate and Medical Student Enrichment (CAMSE) も企画・遂行に携わっております. (なお, (7)は懇親会での写真です.)



Board of Governors 2009 Spring Meeting

Vice President 上野文昭

Internal Medicine 2009 に先立って開催された2日間の Board of Governors Meeting に黒川支部長の代理として出席しました. Japan Chapter Meeting でお馴染みの President, Dr. Harris や Dr. Meyer に再会し, 日本支部のすばらしい皆さまによろしくとの伝言を承りました.

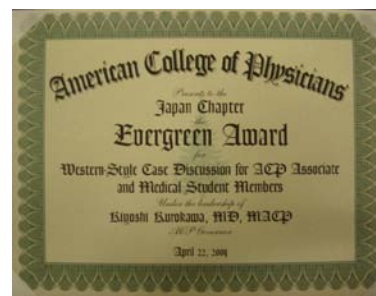
例年のように朝早くからクラス会議や全体会議が続きました. 大きな話題の一つとして, 昨今の経済不況の影響で ACP の財政基盤も揺らいでいるという問題が提起されました. 魅力的な新しい教育マテリアルを開発し, 新規加入会員の獲得に期待するほかはないようです. 多くの潜在層を有する日本支部では, ACP 会員の

benefit をより多くにアピールし、会員の recruit and retention に努めるべきであると感じました。

中南米・カナダ・日本支部が参加する International Breakout Session の機会もありました。昨年度から International Councils が選出され、International Chapter の発言力が増しているように思われます。Internal Medicine 2010 はカナダのトロントで開催されます。ACP はこの機会にカナダ内科学会との協力関係を密にし、カナダからより多くのメンバーの入会を期待しています。International Member の年会費も話題となりました。米国内会員に比べ十分なディスカウントが考慮されていますが、それでも経済力の乏しい中南米諸国では会費がネックになっているようです。この点に関して日本はあまり要求できる立場にないようです。

今回 29 項目ある決議案がクラス会議などで十分討議された後、最後に Business Meeting にて手順に則って手際よく修正され、採否が決定されました。わが国と関連性の少ない医療システムの問題も少なくないようです。最終的に保留になった決議案に、内科医の定義を明確にすべきという提案があり興味を惹きました。「内科医とは、広範な多様性のある臨床技能と高度の研修によって、成人や青年期の患者の持つ大多数の疾患に対して、洗練された非外科的、倫理的、継続的、協力的、包括的ケアを提供する特別の専門医である。内科医はあらゆる臨床状況において、ほとんどの患者の成人初期から人生の終末に至るまで、継続的な健康と良好な機能を保証するため、すべての範囲の診療にわたって、疾患を予防し、診断し、治療する。」という定義づけです。専門知識や技能を持たずに勝手に内科を標榜している医師が多いわが国でも、大いに参考にすべきと感じました。

Awards Luncheon では、今年もまた日本支部は Evergreen Award を受賞しました。Western Style Case Discussion が評価されたものです。Dr. Gremillion, 小原まみ子先生、研修医・学生ボランティアの方々のご尽力に、この場を借りて深謝いたします。



Internal Medicine 2009-Convocation 先導報告

Treasurer 高林克日己



た会員の発表式、授与式のような内容である。今年の FACP 昇格者は 1,226 名で、そのうち全米から 526 名が出席しているというから、米国の FACP にとっても大事な式であることが推察される。実際会場では多くの new fellow の面々が家族に祝福され、写真を撮っている姿があちこちにみられるし、決して若い先生ばかりでなく、結構年配の先生

本年度の ACP 総会は、ACP 本部のある地元 Philadelphia で開かれた。会場は downtown の真ん中にある巨大な convention center である。4月23日から25日の会期のうち FACP (Fellow of ACP)の Convocation は初日の23日の夕方、この convention center の大会場で行われた。Convocation にはどうも日本語の適訳がない。召集等と辞書にはあるが、要するにあらたに FACP, MACP (Master of ACP)となっ



もたくさん見受けられた。今年
の日本支部では 27 人が Fellow
となり、その中で小出優史、高野健
太郎、前田伸樹、松下雅広、村上純、山本昌
弘、横森弘昭の 7 名の先生方が出席された。
今年はまだ黒川会長に次いで日本人で二人目
の MACP を授与された石橋大海先生が壇上
に上がった。



Convocation では独特の角帽を被り、
また上衣を羽織って参加すること
になる。この姿はまさに羽織袴に相当

するいでたちで、日本人には馴染みがなく、まるでハリーポッターのような世界であるが、それがまた楽しいといえ
ば楽しい。これらは当日会場のすぐ横で着ることになるが、それこそ俄か魔法使いの大集合のような世界が展開し、
辺り一面大騒ぎである。私も自分が参加した時のことを懐かしく思い出したが、それ以上にまたこれから先導する責任の重さを感じざるを得なかった。Convocation は家族が見守るなか、広い会場に各州の支部が alphabet 順に入場する。Japan Chapter は外国でありながら、Iowa と Kansas の間に挟まれる。まるで米国の一州に成り下がったような奇妙な感じであったが、このことをあとで昔の host family に話すと転げまわって笑うので、多分アメリカ人にとっても奇妙なのだろう。因みに Japan Chapter 以外の外国人は一括してまとめられ

新 Master: 石橋大海先生; 先導役: 高林克日己先生; Chapter Awardee: 井出広幸先生; 新 Fellow: 小出優史先生, 高野健太郎先生, 前田伸樹先生, 松下雅広先生, 村上純先生, 山本昌弘先生, 横森弘昭先生



ACP President の Dr. Jeffery Harris より Master を授与される石橋大海先生

て(Iowa の前の International)扱われていたことからしても、Japan Chapter の存在は大きく、特別扱いになっていることは事実である。また Japan Chapter の会員数が多いことから Japan Chapter の MACP の数は二桁であってよいと、のちに聞かされた。実際小さな州からは 1, 2 名のところも多く、複数の州で一つの支部という例もある。壇上では新 MACP の紹介が一人ずつ行われ、石橋先生が授与を受けると日本支部から modest な拍手が起こった。この後新 FACP も支部ごとに紹介され、一斉に起立するのであるが、これが前の Iowa の次ではなく、後ろから順に行われるために、J の次に何が来るのか一瞬迷った。Kentucky いや Kansas ! ということで、Japan の声に一同一斉に立ち上がり、私の大役は無事終了したのである。そのあとホテルでの小宴があり、有志は町へ眠気も忘れて二次会に繰り出していった。これからも多くの方がこの感動を是非味わうことができるようにと思いつつ。

て(Iowa の前の International)扱われていたことからしても、Japan Chapter の存在は大きく、特別扱いになっていることは事実である。また Japan Chapter の会員数が多いことから Japan Chapter の MACP の数は二桁であってよいと、のちに聞かされた。実際小さな州からは 1, 2 名のところも多く、複数の州で一つの支部という例もある。壇上では新 MACP の紹介が一人ずつ行われ、石橋先生が授与を受けると日本支部から modest な拍手が起こった。この後新 FACP も支部ごとに紹介され、一斉に起立するのである

恒例の日本支部レセプションは4月24日金曜日の夜、「Internal Medicine 2009」の会場と隣接するマリオット・ホテル(マリオット・ダウンタウン)の一室で行われました。毎回金曜日の夜は各支部ごとに同じようなレセプションが行われるのですが、日本支部レセプションは其中でもとりわけ活気があったように思えました。日本からは新フェローの皆さんとご家族をはじめ今回は新マスターの石橋大海先生ご夫妻、日本支部の Vice President の上野文昭、小林祥泰両先生、Treasurer の高林克日己先生、理事の朔啓二郎先生、Recruit-a-Colleague Program で Internal Medicine 2009 無料登録券(ホテル代と一部航空券も ACP 本部が負担)を得られました岩瀬三紀先生、毎年リピーター参加されている山形県日本海病院の小山雄太先生、事務局の宮本さん、それに私という顔ぶれでした。



会場を訪れた日本支部以外の方の中には現 ACP 会長の Jeffrey Harris 先生、前会長の David Dale 先生ご夫妻、次期会長(President-Elect)の Joseph Stubbs 先生ご夫妻、それに Executive Vice President の John Tooker 先生、という ACP のトップを担う方々もお出でになりました。その他にも開会式で基調講演をなさった Harold Sox 先生ご夫妻(先生は Annals

of Internal Medicine 編集長を7月で退任されます)、教育担当理事の Steven Weinberger 先生、2002年の京都での国際内科学会議の時の国際内科学会長だった Joseph Johnson³ 世先生(なんと息子さんの Joseph Johnson⁴ 世先生を含めたご家族数名で来てくださいました)、チリご出身の ACP 理事 Jose Rodriguez-Portales 先生ご夫妻、ロード・アイランドご出身の理事 Yul Ejnes 先生、カリフォルニアの理事 Faith Fitzgerald 先生、前理事会議長の Joel Levine 先生、支部長会議議長の Donald Hatton 先生ご夫妻、日本での研修医教育に一役買ってくださり「メジャー・リーガー」として有名な William Hall 先生と George Meyer 先生、今回の年次セッションで「Top Ten Symptoms」という講義をなさっていたワシントン大学教授の Douglas Paauw 先生、日系人のマスター、Koichi Tanaka 先生(偶然ですがタナカ先生のご両親は私の居住地、埼玉県上尾市のご出身だそうです)、その他まだまだ書き足りないくらいのゲストがお見えになりました。

会の途中で、今回マスターになられた石橋大海先生をお祝いするための日本酒での乾杯が小林先生の音頭で行われ、会場は華やかな雰囲気になりました。石橋先生のスピーチの後も会場のあちこちで和やかな歓談が続きました。



石橋大海先生ご夫妻

連絡事項

事務局からの連絡方法について

ACP 日本支部事務局からのご連絡は E-mail にて行っております。連絡がつくメールアドレスをお知らせいただきますよう、お願い申し上げます。尚、各種メーリングリストからの登録削除やアドレス変更がある場合には事務局までご一報ください。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

ACP 日本支部事務局 (担当 宮本晴子)

〒113-8433 東京都文京区本郷3-28-8 (社)日本内科学会内

Tel: 03-3813-5991 Fax: 03-3818-1556

E-mail: acp@naika.or.jp

Web site: <http://acpjcnaiika.or.jp>

